

2012 年度第 4 回 <群馬県安中市ツーリングのご案内> (通算 38 回)

今回赴く安中市は江戸時代より安中藩として中山道の宿場、関所がおかれるなど交通の要衝であり武家屋敷や宿場がまだ保存されている歴史情緒あふれた街です。



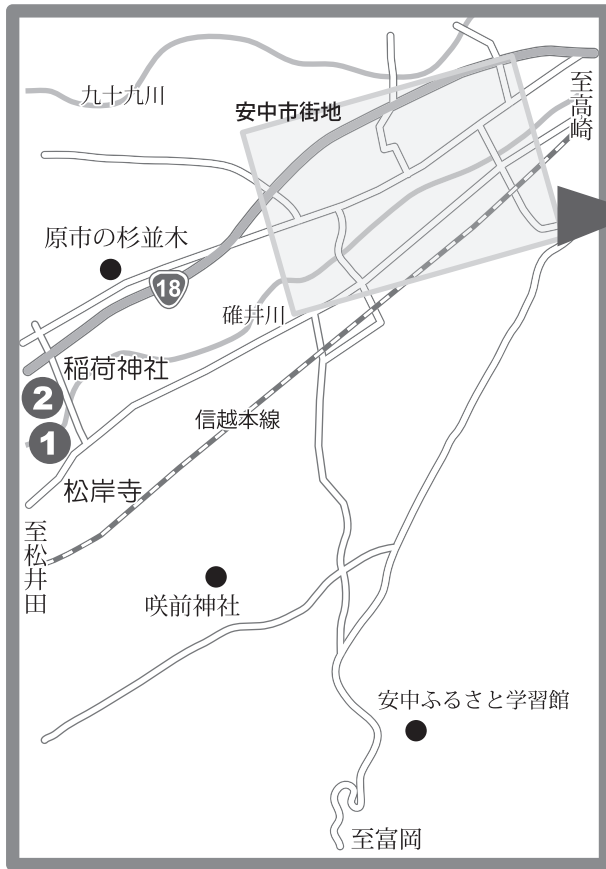
◎日 時：7月1日(日) 午前10時

◎集 合：東松山駅西口

◎会 費：2,500円＋昼食＋高速料金 1,000円

◎連絡先：LLP じもとメディア TEL&FAX 049 (257) 8739 (市川)

予定時間	見学場所
10:50	富岡インター 上信越自動車道
11:05	J A富岡食彩館本店(富岡市) お土産
11:50	松岸寺(安中市上磯部) <佐々木盛綱墓>
12:15	城山稻荷神社(安中市築瀬) 築瀬城跡
12:30	食事(高嶋屋) 和食
14:10	三社神社(安中市街地) 石川忠房碑・旧郡役所跡に駐車
15:00	武家長屋(安中市街地)
15:50	妙光院(安中市街地)
16:10	新島襄旧宅(安中市安中)
17:00	富岡インター 上信越自動車道
18:00	東松山駅東口解散



土産

● **JA 甘楽富岡 - 食彩館本店**
 群馬県富岡市富岡 2638-1
 Tel.0274-60-1123

昼食

● **高嶋屋**
 群馬県安中市安中 3-12-15
 Tel. 027-381-1616

1 松岸寺

2基の五輪塔があり、伝承では源頼朝家臣、佐々木盛綱夫妻の墓と伝わっている。

2 城山稲荷神社

一目で城址だと分かるほど土塁などの遺構が残っている。本殿の彫刻も良い神社。

3 三社神社

幕末の旗本石川忠房の記念碑がある神社。
 詳細は今井講師の話で…。

4 武家長屋

安中藩士が住んでいた長屋。江戸末期に建てられたと推定され、三軒が現存している。。

5 妙光院

安中城の真横にあったと思われるお寺。仁王門や本堂の大屋根など。

6 新島襄旧宅

安中藩士の新島襄が明治時代に活動していたときに住んだ屋敷。資料館もある。

安中城と安中氏

安中城は碓氷川と九十九川に挟まれた台地上に築かれた城で、築城は永禄二年という。越後の新発田からこの地に入った安中忠政は、箕輪城の長野業政らとともに上杉氏に属し、武田信玄と瓶尻（三日尻）合戦で戦って敗れた。忠政は永禄二年、武田軍の西上野進攻に備えて、安中城を築き、嫡子忠成を入れ、忠政自身は松井田城を補強して入城した。

永禄四年、信玄は安中・松井田の間にある八幡平に陣城を築いて両城を分断し、連年兵を繰り出してはこの地の作毛を刈取った。永禄七年、信玄は碓氷に進攻した。安中城の忠成はただちに降ったが、松井田城の忠政は奮戦し、刀折れ矢尽きて降伏。信玄は忠政の勇武を惜しんだが自害を命じ、忠成はそのまま安中城主と認められ、名を景繁と改めて信玄に属した。

天正三年五月の長篠合戦では、景繁麾下の百五十騎はことごとく戦死し、安中へ帰ったものはいなかった。城地はやがて荒廃し耕地と化した。

その後の城主変遷

天正十八年、徳川家康が関東に入封すると、安中は箕輪城主井伊直政の領内となった。直政はその後、高崎城へ移り、関ヶ原合戦後は近江の佐和山へ移ったものの、安中はその分領とされた。慶長七年、直政の跡を継いだ嫡男の直勝は病弱の故、弟直孝に家督を譲り、直勝は安中三万石を領して、碓氷と壱（渋川）の両関所の守備を任務とした。

正保二年、安中の井伊氏は三河西尾へ移転し、水野元綱が入封したが、その子元知が寛文七年五月、発狂して妻女を殺害し、改易になった。ついで堀田正俊が下総守谷から移入して二万石を領した。正俊は天和元年九万石を得て、古河に転封し、まもなく大老に就任した。（正俊は五代将軍綱吉擁立の功労者で、綱吉の政治を指導したが、貞享元年八月二十八日、殿中で稲葉正休に刺殺される）。

堀田氏の古河移転後、安中へ入封したのは板倉重形で一万五千石。重形の子重同のとき、磐城泉へ移封し、替わって元禄十五年に内藤政森が安中城主となる。さらに寛延二年（1749）には、板倉重同の子勝清が遠州相良から入って、安中二万石となり、以降、明治維新まで板倉氏の支配が続いた。

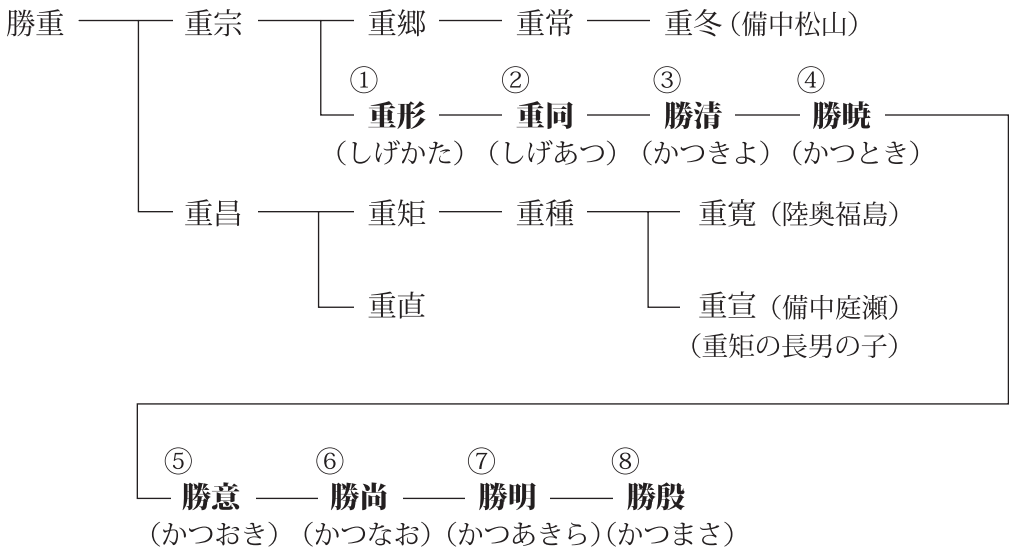


現存する武家長屋

安中の板倉氏歴代

天和元年、安中城主となった板倉重形は、幕府草創期、五十年にもわたり京都所司代を勤めて、世に”名裁判官”と称賛された板倉勝重・重宗父子が祖父・父という譜代の名門である。重形は重宗の次男に生まれ、秀忠に仕えて一千石、兄の重郷から九千石を分与されて一万石となり、さらに五千石の加増を得て、天和元年、安中一万五千石の城主となった。

【板倉氏略系図】 *太字が安中歴代藩主



●勝重・重宗父子の名裁判は『板倉政要』として世に知られ、江戸時代を通して町奉行職の手本とされた。とくに重宗は裁決を下すにあたり、つねに公正明快であり、「断獄、神明の如し」と評された。

重宗の弟重昌は、早くから家康に仕えた“近習出頭人衆”の一人で、大坂の陣では、和睦の交渉と豊臣家の起請文を受け取る使者を勤めた。この時二十六歳。家康没後は秀忠・家光に仕え、寛永十四年肥前島原の乱が起こるや、その追討使に任じられたが、翌年十五年正月元旦、西国の軍勢を率いて原城を攻撃中、壮烈な戦死を遂げた。

●初代安中城主の重形は、天和元年に寺社奉行に就任。藩政では田畑の売買についての庄屋の承諾印を必要とすることや、領内に杉の苗を植えて安中街道の整備に力を注いだ。

●二代重同は養子である。貞享三年重形の遺領を継ぎ、元禄十一年小姓となり、翌年に伊予守に叙任された。翌年陸奥泉に移封。享保二年四十歳で没した。

●三代の勝清は享保五年伊予守に叙せられ、同十五年大番頭、同二十年には寺社奉行を兼ねて若年寄に就任した。佐渡守と改め、延享三年遠州相良へ移封した。

寛延元年五千石の加増があり、翌年に安中城主となる。宝暦十年には御側用人となり従四位下に叙任、明和四年老中に昇り、一万石を加増されて都合三万石となる。藩政では「御定書八十八カ条」を公布し、村政の基本とした。

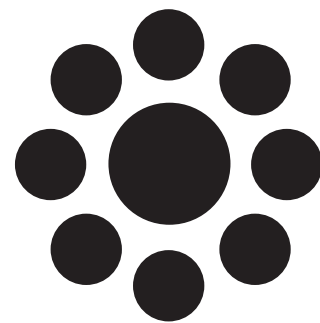
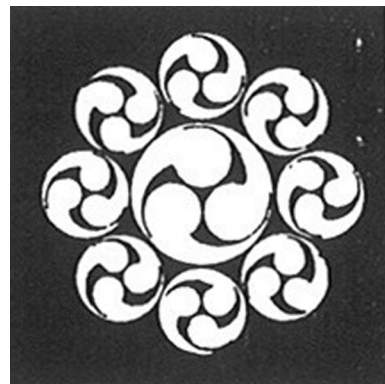
【勝清、刃傷の難を逃れる】

この勝清を殺害しようとして、間違えて肥後熊本藩主細川越中守宗孝を刺殺する事件が起きた。延享四年八月十五日のことである。

板倉氏は系図のように四家は大名家であったが、重昌の次男重直の系統は旗本となった。寄合七千石の板倉修理勝該（かつたね）である。修理は日頃から狂気のふるまいがあり、些細なことで家臣や召仕を叱りとばし、発作的に手討ちにすることもあった。家老の前島林右衛門は心配のあまり、権勢著しい若年寄の勝清に相談した。前島は修理を隠居させて、勝清の子息の一人を養子に迎えたいと願った。これを知った修理は怒り狂い、前島の首を刎ねようと追い掛け廻した。前島は「御家大事」と考えたのに「犬死しては是非もない」と家族を率いて修理の屋敷を立退いた。前島が去った後はだれも修理に諫言する者がいなくなった。

修理はひっきょう勝清が七千石のわが家に乗っ取るつもりなのだ、と邪推し、勝清を殺害しようと怨念を滾らせた。かくて延享四年八月十五日、この日は月並の御札に在府の諸大名が総登城する。寄合の修理は登城する必要はないが、勝手に登城し、城中のあちこち勝清を探し求めた。大広間の便所の手水場に板倉家の「九曜巴」紋が目に入った。これぞ、勝清に相違ないと修理は恨みを込めて背後から斬りつけた。傷は首筋横七寸、左肩六、七寸、右肩五寸、背中から脇腹へ一尺五寸も斬られる重傷で、その場で絶命した。ところが、相手は勝清ではなく、細川越中守宗孝であった。細川家の家紋「九曜紋」を見間違えたのである。

板倉家の「九曜巴」と細川家の「九曜紋」は、勝清を殺害しようと血走っていた修理には見分けがつかなかったのだろう。勝清は運よく難を逃れたが、気の毒なのは細川宗孝である。わずか三十二歳だった。



板倉家九曜巴(上)と細川家九曜紋(下)

●勝清の跡を継いだ勝暁は寛保元年、従五位下伊勢守に叙され、安永九年安中藩を襲封した。天明三年奏者番となり、従四位下に進み、肥前守と改める。が、この年七月、浅間山が大爆発を起こし、上州一円は前代未聞の溶岩と降灰によって大災害に見舞われた。安中領は全域にわたって田畑の作物は全滅し、穀物の価格が暴騰した。この頃、安中領では養蚕業が定着し、米は信州の佐久米の移入に依存していたから、大爆発による交通路絶で物資の輸送ができず、深刻な状況に落ちいった。これに対し、藩の救済は意外に手間取り、業をにやした農民は救済を要求して立ち上がった。米の買い占め、売惜しみの米穀商人は相次いで打ち壊わされた。一揆はしだいに増大し、信州佐久へ米を求めて移動していった。安中藩はじめ東信濃諸藩によって一揆は鎮圧され

たが、多くが入牢・打首・遠島に処されている。

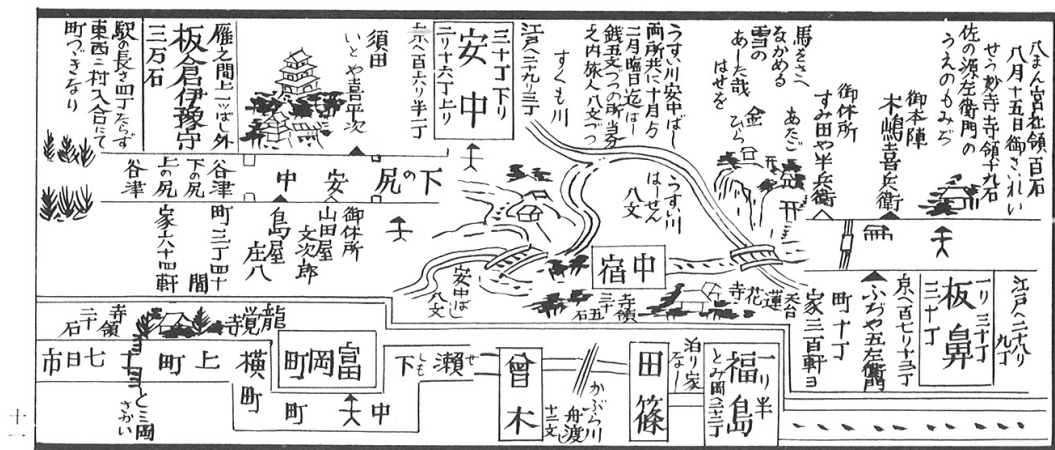
●四代勝暁・五代勝意・六代勝尚と安中藩主は続いた。七代藩主勝明は幼少から学問を好み、文政三年（1820）十二歳で就封してからも、政務をとる以外は終日机に向かっていたという。学識は深く、『西征紀行』『東還紀行』の二書を著している。勝明は権門勢家に入りして立身出世を願わず、三十六歳の時、奏者番を辞退し、以後、藩政に専念し、領内の橋の修復、桐・漆・杉の植付け、宿場の整備などを行なって、“名君”と称えられた。

文教方面でも藩校「造士館」を整備・拡充し、庶民教育の郷学校を設立した。勝明は藩財政と農家収入の増加をはかろうと、安政二年には領内の空地に漆百万本を植える計画を立て、五料村に二万九千本、横川・原村に三千百本の苗が植付けられた。その後も慶応二年、漆苗木三千百本、桐苗木五十本。翌年杉一万本が植付けられたが、結局、これらの植林事業は農民の非協力によって、ことごとく失敗に帰した。

●勝明の武芸奨励の一つに、藩士による“遠足（とおあし）”がある。安政二年五月、五十歳以下の藩士が城下から碓氷峠の権現まで、約三十キロの道程を歩いて、その速さを競った。参加者は九十五名、それが十六組に分かれて出発し、その着順は碓氷権現の神主が記録している。初日は五月十九日で七人の藩士が参加し、神主は到着時に熊野権現にお神酒をあげ、一同に酒・干鰯・力餅を出して、その労をねぎらったという。わが国マラソン競技の嚆矢であろう。

安中宿と道中奉行石川忠房

安中宿は中仙道六十九次の中でも小さな宿場だった。天保十四年（1843）の宿内の人別は三百四十八人。家数は六十四軒、うち本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠屋十七軒であった。「道中案内」を見ると、安中宿に入る手前の碓氷川と九十九川の二つの橋を渡るのに、両橋とも橋銭五文のところ、十月から二月まで旅人は八文を取られた。高崎から板鼻宿の間の烏川の橋銭も、やはり十月から二月まで八文となっている。



宿場の中心部だった今の安中三丁目の伝馬町公民館の裏に、石川忠房の生祠（生きているうちに神として祭祀される）が再建されている。

石川忠房は三百俵の身から、大番士、組頭と進み、寛政二年目付になった。翌年、ロシアの特使ラックスマンが漂流民大黒屋光太夫の送還とともに通商を求めてきた。忠房は松前に派遣され、三度にわたって会見し、通商条約の締結を拒否して、長崎入港を認める信書を与えた。

寛政七年、作事奉行に昇進し、従五位下左近将監に叙任。同九年勘定奉行となり二百石の加増を受け、蔵米を改めて都合五百石の知行地を上州山田郡山地村・堤村・植野村の三村のうちに与えられた。忠房は荒地を開くなど村民の福利をはかったので、堤村の村民はその徳を称え、文化七年（1810）同地に“石川三社大明神”として生祠を建てて祭祀した。

忠房は寛政十年には道中奉行を兼任し、一時、西丸留守居に転じたが、文化二年にまた勘定奉行兼道中奉行となり、道中奉行在職十七年におよび、その間、数多くの宿駅制度の改革を成し遂げた。安中宿は小宿であったので、規定の五十人・五十疋の人馬の継立が困難であるというので、文政五年から二十五年間、二十五人二十五疋の継立に半減したという。

天保五年（1834）藩主板倉勝明は忠房の生祠碑を城内に建て、その由緒を記している。

●妙光院の板倉九曜巴紋

妙光院は安中歴代藩主の祈願所であった。安中藩主として板倉家が一番長く、天和元年（1681）から元禄十五年（1702）の前期と、寛延二年（1749）から明治四年（1871）の廃藩置県までの後期で、合わせて百四十余年に及ぶ。板倉家の厚い信仰と庇護があり、本堂の屋根には「板倉九曜巴」紋が輝いている。



三社神社にある石川忠房生祠の碑



松岸寺にある佐々木盛綱墓所



築瀬城跡に建つ城山稻荷神社



新島襄旧宅と裏にある漆園記碑（安中藩主板倉勝明がおこなった政策の利益配分を記す）



— 次回予告 —

鶴ヶ島 脚折雨乞行事見学

8月

8月5日（日）午前11時 若葉駅南口集合

今回は通常のツーリングとは趣を変えて、脚折雨乞行事を見学します。

美里・上里・神川・藤岡見学

9月

9月2日（日）午前10時 東松山駅西口集合

3回目の児玉地方への訪問です。前回行けなかった場所へ伺います。

◆訪問予定箇所

- ・児玉神社（義民遠藤兵内お宮）
- ・吉祥院
- ・幸春院（阿保氏建立のお寺）
- ・浄輪寺（和算家関孝和墓所）など

※予定のため、実際伺う場所が変更される場合があります